

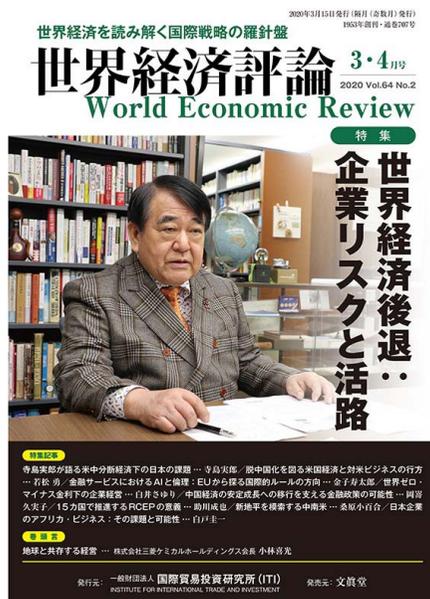
Back Number

本論文は

世界経済評論 2020年3/4月号

(2020年3月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF



定期購読
期間中

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

ミチさんと映画出演

佐藤 紘彰

友人だった女優ミチ・コビさんの映画4本を続けて見た。ミチさんが亡くなる前後のことは本誌昨年11~12月号で書いたが、そこで記したように、その状況を詳しく述べてくださったのはMargaret Nakamuraさんだった。映画はDVDをマーガレットさんのご夫君の秀明さんがくださっていた。

ミチさんは、1924年サクラメントで生まれ、真珠湾攻撃とニュースで聞いて、「え？ Pearl Harborってどこにあるの？」と人に尋ねたそうである。当時ハワイはアメリカが1898年併合した領地だったが、州ではなかった。だから、16~17歳くらいの女学生がそこに海軍基地のある港の名を知らずとも不思議ではない。

ミチさんは、それから間もなくルーズベルトの行政命令で強制収容所に入れられ、人生の理不尽さにしばらく半狂乱になったという。戦後は30歳ごろから舞台やテレビ劇に出るようになり、30歳半ばで次々に4本の映画に出演した。

日本の若者の射殺

その最初の映画が1959年の「Tokyo After Dark」。インターネットの筋書きによると、この映画は日本の米兵が若い日本人を射殺した事件に基づくというから、期待をもって見た。1950年代の後半、ぼくは九州で高校生だったが、米兵の日本人射殺事件は時々新聞やテレビが大きく扱っていた。

映画の主人公ダグラスは憲兵。開幕、ダグラスが入るパーともキャバレーともつかぬところで歌う日本人女性歌手に聞き惚れる。この歌手フジタ・スミを演じるのがミチさんである。そこを出て、自分の車を盗もうとする2人の日本人青年に出くわし、これを阻止しよう格闘するうちにダグラスの拳銃が暴発、一人が死ぬ。

これは犯罪ではないと信じるダグラスは、日本法に身を任せるか米国の軍法裁判にかかるかを迫られて、逃避する。それも恋人のスミに依存してのもので、結局、日本の「臭い」監獄に入るより自国の軍法裁判にかかるため、スミと別れて帰国する。

この映画は製作費がほとんどなかったのだろう、どうもLAのLittle Tokyoかどこかで撮影したらしい。話の進み具合もチャチ、なんともいいようなない、やっつけ仕事で、ミチさんが歌うパーの名前は、なんと、Sukiyaki。占領後の日米関係の困難な問題を扱いながら、こんな役割を与えられたミチさんが哀れである。

ムラタ博士

ミチさんの次の映画は「12 to the Moon」で、1960年に出た。題から想像されるように、月に12人を送ったことを描く。これは制作した時期から考えるとおもしろい。

ソ連がスプートニクでアメリカを動転させたのが1957年10月。そのため、アメリカは学校教育では科学と数学でソ連に立ち遅れていると、俄然二つの教科に力を入れた。次にソ連のユリ・ガガーリンが初めて宇宙を馳せたのが1961年4月。アメリカは更に驚いた。大統領に就任したばかりのケネディが、翌5月の演説で、「アメリカは向こう10年以内に人間を月に送る」と宣言したのは、それを直接反映したのだろう。

もっとも、ケネディは1960年の大統領選挙では米ソ間のミサイルギャップを打ち出していたから、これもその宣言に関係がある。ただし、ミサイルギャップは後に虚偽だったことが判明した。

ところで、この映画で月に12人の人たちを送るのはソ連でもアメリカでもなく、International Space Orderであって、月到着の目的は月を「国

際的領地」と宣言することにある。このように米ソの角逐をわざと無視したところは愉快だが、月に送られるのは男性10名、女性2名、各国1人、合計12カ国を代表する。そうした12カ国がどのように選ばれたのかも考えてみるとおもしろい。

女性の1人ミチさんの演ずるムラタ・ヒデコ博士は日本を代表する。ムラタは博士という称号を持つだけに、月住人の「大調整役」から送られた絵文字(!)を解説、「月を汚染する前に直ちに月を去れ」という命令を知る重要な役割を与えられている。ただし、宇宙船はアメリカ人隊長以外皆博士である。

他方、開幕、国際宇宙機構の代表が、これは「全世界20億余人が注目する」壮挙と重々しく述べるのは、わずか60年前、世界人口が今の4分の1で、以来の人口膨張の大きさに改めて驚く。後の推定では同年世界人口は30億人だったというが、それでも現在は2倍以上である。

Honolulu Fun Girl

同じ年に出た「Hell to Eternity」は、映画としては4本の中でいちばん形をなしている。これはGuy Gabaldonというアメリカ海兵隊員の伝記映画(biopic)だからだろう。

ガバルドンは1926年、LAでメキシコ人を両親として生まれ、少年の時に日系人ナカノ夫妻に養育される。真珠湾攻撃の後ナカノ一家は強制収容所に入れられ、一方ガバルドンは海兵隊に入った。1944年夏、アメリカ海兵隊はサイパンとテニアンを攻撃を開始、この戦いで、ガバルドンは、玉砕、自殺に追い込まれた日本兵と日本民間人のうち1,300人を降伏説得した。その時、ナカノ一家から多少覚えた日本語が役だった。

この映画は「戦争の現実を再現」と予告編でいうとおり、凄惨な戦闘の描写に力を入れ、同時に

戦場外の兵隊の乱痴気騒ぎも描く。しかし主目的は日本人救出にある。映画人Brian Trenchard-Smithが最近指摘したように、「Hell to Eternity」を通常の戦争映画と異なったものになっているのは、これが一兵隊の、善から悪へ、そこから善に戻る、道義的巡歴を描くことにあるからだ。

この筋書きからすれば、ミチさんは、例えばナカノ一家の主婦の役を与えられるべきだったろうが、実際に当られた役割は、海兵隊員がサイパンに出撃する前のホノルルのバーのママだった。これも同じくトレンチャード・スミスが言うことだが、この映画が作られたころのハリウッドは、主人公の実際の人種に合わせた俳優を選ぶ体制にはなく、ガバルドンを演じたのはラティノではなく、時の人気白人男優ジェフリー・ハンターだった。

これはミチさん自身指摘していた。同じ1960年の秋、テキサスの古い新聞The Victoria Advocateのインタビューで、「ハリウッドはオリエンタル女優に重厚な(meaty)役割を作らない」と述べたのだ。せいぜい「Hell to Eternity」で演じたようなHonolulu fun girl程度だった。

この翌年に出た「Cry for Happy」はドタバタ喜劇である。米海軍兵4人が日本のgeisha houseで騒ぐ。ミチさんは4人の芸者の1人。またfun girlを振り当てられたわけだし、台詞も少ない。ただ、この映画は日本で作ったようで、ミチさんは「Tokyo After Dark」と異なり、本物の着物を本物の着付けで着て、その点だけでも楽しんだことを望みたい。

中村秀明さんによれば、ミチさんは「80歳を越えても時々オーディションに出かけていた様です」とのことだ。

さとう ひろあき 翻訳家 コラムニスト在NY